

（論文）

自由意志論型の神義論

—アウグスティヌスとアルヴィン・プランティンガ

本 多 峰 子

序

悪の存在や人間の苦難は、古来すべての宗教が対峙してきた主要な問題である。特に、善なる創造主を唯一の神と信じるキリスト教においては、この世に悪が存在することが、大きな信仰上の問題となる。全能で、しかも善なる神が創造した世界に悪が存在するということは、明らかな論理矛盾に思われるからである。神が善であれば悪をなくしたいと思うであろうし、神が全能であればそうできるであろう。しかしこの世には悪がある。神は全能か、善性か、その両方を欠いているのだろうか？¹ 近代ではここから、全能で善である神が存在するならば悪は存在しないはずである、という、神の存在自体への懐疑さえも起こってくる。J. M. トローは、無神論者が悪の存在を証拠として神の存在を否定するむきにあること、それに対して今日の有神論者は、悪の存在は神の存在を否定する証拠としては不十分であるとする、そして懐疑論者は、悪の存在が神の存在を否定するかなり説得力のある証拠ではあるが、決定的ではないとする立場をとっていることを指摘している。²

「神が全能かつ善であるならば、なぜ悪が存在するのか」、という問いに答える選択肢は、大きくまとめると以下のようになる。

- 1) 神は全能でありしかも善であるが、それと悪の存在は矛盾しない。
- 2) 神は全能であるが、完全に善であるわけではない。（あるいは、神はこの世に無関心である。）
- 3) 神は善であるが、全能ではない。
- 4) 神は善ではないし、全能でもない。
- 5) 神は実は存在しない。

伝統的な神義論は、1の「神は全能でありしかも善であるが、それと悪の存在は矛盾しない」という立場をとってきた。2の、神の完全な善性を否定する見方には、たとえばユング

のように、神には通常三位一体といわれる父と子と聖霊との3つの位格の他に第四の面があり（それをユングは、「四位一体」と呼んでいる）、³それがわれわれの言う悪の面であると見る見方がある。ユングは、旧約聖書のヨブ記にあらわれた神について「ヤハウエは […] 迫害者でありかつ助力者である。しかもどちらの面も等しく現実である。ヤハウエは分裂しているのではなく、二律背反なのである」⁴と言う。また、一神教の神ではないが、インドのシバ神は創造主であると共に、破壊者であると考えられてきた。3の立場としては、20世紀から注目されているプロセス神学の神義論がある。これは、神がこの世を作った最初の創造は、無からの創造ではなく混沌からの創造であり、そのときの材料となったものはその最初から持つ力により、神にさえも抵抗できる力を持つと考える。そのため、この世に悪があることも神の責任ではなく、神の善なる説得の聲に従わないものの責任であると考えられる。また、上記のうち、4は、通常神義論では考えられない。5については、スタンダーが「神のできる唯一の弁解は、神が存在しないということだけだ」と言った言葉がよく引かれる⁵。しかし、そのように無神論をとる者は、実際は、「神とは全能かつ善なる者であるはずだ」という伝統的な神概念を保持しているので、やはり、矛盾した形で神を信じていることになる。

1の、神は全能かつ善である、という見方を保持する立場には主に次のようなものがある。

- a) われわれの苦しみは、神の罰である。
- b) すべては神の神秘であり、人間の知の及ぶものではない。すべてに神の摂理があると信じて受け入れるべきである。
- c) 神は人間に自由意志を与えた。人間はその自由意志の濫用で墮罪を犯し、それゆえに悪がある。（カトリック教会に受け入れられてきたアウグスティヌスの立場）。
- d) 悪の存在は人間の成長の糧となり、人間を完成に導くために不可欠である。（ギリシア正教会に主に受け入れられてきたエイレナイオスの立場）。
- e) この世は、理論的にありうる限りで最善の世界である。
- f) 自由意志論と、成長の糧論との混合

今日代表的な神義論としてプロセス神学の神義論は他で論じたので⁶、本論では伝統的なアウグスティヌスの神義論とエイレナイオスの神義論のうち前者を整理分析し、その妥当性を考察することを課題とする。これら2つは、神の善と全能を前提とした見方では、最も重要な2類型を代表する。アウグスティヌスの考えは、ローマ・カトリックの教義に組み込まれ、西洋キリスト教会の中心的教義として伝えられてきた。この、アウグスティヌスの神義論の流れに立つものとしては、今日代表的なものとして、米国組織神学者アルヴィン・プランティングの自由意志弁護論がある。一方、2世紀にリヨンの司教となった教父エイレナイオスによるいわゆるエイレナイオス型の神義論は、今日、英国のジョン・ヒックによって再発見され提唱されている。2世紀リヨンの司教エイレナイオスが採択し、明確に文書化した議論である。この考えによれば、人間は子どものように未成熟な状態で作られ、善と悪とを両方体験することによって神の似姿としての完成に導かれてゆく⁷。それゆえ悪の存在は人間の成長の糧となり不可欠である。神は最初から人間に完成を与える力があつたが、人間は幼少期にあつたのでそれを受けとることが出来なかつたのである⁸。このように、この論は、救済論的には人間の神化を考えている。この、エイレナイオスの神義論については他の稿で考える

予定であるので、ここではアウグスティヌスの神義論に代表される自由意志弁護論を検討することに進む。

1 アウグスティヌスの神義論

アウグスティヌスの神義論は、ジョン・ヒックなどによって自由意志神義論の典型とされている。彼の神義論は、自由意志の濫用を人間の罪の源としたことで、はっきりと悪の責任を神でなく人間と論じている点で、自由意志論の基本である。ヒックは、アウグスティヌスの神義論を

アウグスティヌスが後世に残した劇的な構図はこうである。神は無から宇宙を創った。宇宙はありうる限り豊かな種類の被造物となり、被造物はみな善かったが、それぞれ善の階層の異なった部分を占めていた。その階層の一番上に立つ存在は、天使であった。神に従っている限り彼らは幸せであったが、彼らは無から創造されたために、不変ではなく、神に離反することもできた。そして、天使の中のある者は、自分たちの自由を故意に濫用して、彼らの善の神的源への幸福な依存をやめて反逆し、自分自身の主であろうとする。そしてそのことによって、彼らは善との真の関係を失い、天国から突き落とされた。しかし、天使の大多数は神への堅い忠誠を守り、永遠の至福を享受している。そのようにして、人間の創造の前からすでに、善なる天使と悪なる天使の住む2つの都市が形作られ、その闘争が、われら人間の歴史を形作ってきたのである。⁹

とまとめている。これは、大きくは自由意志神義論といわれているが、本論ではこれは、実は

- 1) 創造はすべて善であり、悪は善の歪曲か壊廃にすぎない。
- 2) 創造の秩序と全体の調和と美のために悪もあったほうがよい。
- 3) 自由意志の濫用による墮罪（いわゆる自由意志弁護論の核）。
- 4) 悪の芽は被造物が無から創造された故にもつ本質的な不完全さにある。
- 5) 真の悪の存在の否定。
- 6) 恩寵による救い。

といった、幾つかの柱からなることを見る。これらの論は各々、神の善と全能が悪の存在と矛盾しないことを論じているが、相互に多少矛盾があることも明らかになるであろう。

< 1 創造はすべて善であり、悪は善の歪曲か壊廃にすぎない：悪は善の欠如である >

アウグスティヌスは、悪を善の欠如あるいは歪曲と定義した。¹⁰ しかも、悪は善がなくては成り立たない寄生虫的な性質のものであると考えている。人間が悪をおこなうのは、何か価値のあるものを、つまり何らかの善を過度に、あるいは倒錯した方法で求めるときだからである。

悪と呼ばれているものはすべて、壊敗以外の何者でもない […] 知識のある魂の壊敗は

無知と呼ばれ、思慮ある魂の壊敗は軽率と呼ばれ、正しい魂の壊敗は不正と呼ばれ、勇気ある魂の壊敗は臆病と呼ばれ、静かで穏やかな魂の壊敗は欲望とか恐れとか悲しみとか自惚れとか呼ばれる。さらに生命の身体において、健康の壊敗は、苦痛および病気と呼ばれ、力の壊敗は疲弊と呼ばれ、休息の壊敗は骨折りと呼ばれる。さらにまた、物体だけについていえば、美しさの壊敗は醜さと呼ばれ、真直の壊敗は歪みと呼ばれ、秩序の壊敗は乱雑と呼ばれ、完全性の壊敗は分離とか分裂とか減少と呼ばれる。しかしながら、壊敗が害するとは、本性的な状態を破壊することにほかならず、したがって、それは本性ではなく、本性に反するものであることを見るのは容易である。¹¹

彼は、「善の無いところに悪は無い […] 悪はそれ自体では存在せず、何らかの現実体の悪の側面でしかありえない。それゆえ、悪はその源を善に持ち、何か善に寄生しなければ悪でも何でもありえない」¹²とさえ言っている。

アウグスティヌスは、悪を悪だからという理由でことさらに求める者がいることは、前提していない。そして、「善は悪なしにも考えられるが、善なしにはいかなる本性も考えられないということは、すべての本性は本性である限り善であるということを理解するのに、たしかに重要な光となる」¹³と、善の絶対的優位と悪の従属性を主張している。しかも彼にとっては、すべてのものは善なる神に造られたので、善であり、自然は何も神に反していない。けれども、善なる本性も歪曲されることがあり、その歪曲が悪であり、善に反しているのである。

＜2 創造の秩序と全体の調和と美のために悪もあったほうがよい＞

アウグスティヌスにとっては、自然の事物がさまざまな有限性を持っていることは必ずしも悪ではなかった。むしろ彼は、現代のアーサー・O・ラヴジョイが＜存在の偉大な連鎖＞(the Great Chain of Being)¹⁴と呼んだような大きな体系を肯定しており、その全体の豊かさのためにはあらゆる階層の、あらゆる存在度の事物が、宇宙に満ちているほうがよいと、考えていた。¹⁵

獣類や樹木、そしてその他の可変的で死滅すべきものは、知性や感覚を欠いていたり、あるいは全く生命を欠いているものであるが、[…] これらの被造物はそれ自身の限界を創造主の合図にしたがって受けとるのであって、それは、消え去ったり出現したりすることによってみずからの種において、宇宙の低次のこの部分に適合している時節のめぐりの美しさを成就するためなのである。すなわち、地上的なものが天上的なものと同しくされたわけではないのであるが、天上的なものの方がいっそう善きものであるがゆえに、宇宙全体にとってこれら地上的なものは欠けてはならなかったのである。¹⁶

創造が瑣末的なものから高度な複雑なものまで、階層をなしたよき秩序であるという思想は次のようにも言い表されている。

被造物の秩序は、正しい度合いにしたがって、高次のものから低次のものまで並んでいる。その被造界の中で何が異なっていたほうがよいとか、存在しなかったほうがいいのと言ったりすることは、まったくよからぬことである。あるものがそれより優れた

何か別のものようであることを望むことは誤っている。なぜなら、それより優れたものはすでに存在しており、それはすでに完全なのだから、それに付け加えるようなことは誤っている。ゆえに、誰か「このものはあのものようであったほうがよかったのに」と言う者は、完全でよりすぐれた被造物に、さらに何か付け加えることを望んでいるのであり、節度を欠き、不正である。または、より低次の被造物を破壊しようとしているのであり、邪悪で意地が悪いのである。¹⁷

アウグスティヌスは、神の善性と全能とを繰り返し強調している。すべてのものは神に創造され、すべて自然の性質は善であり、「悪」という実体は無い。われわれに悪と見える災厄や寒さや野獣なども、神の摂理による自然の秩序の中でしかるべき位置を占め、全体の美を形成する欠かせない要素となっている。¹⁸ それのみならず、時に、「悪は善の壊滅である」と言った他の箇所の言葉と矛盾するように、自然のものは、壊敗した時でさえも、善なのであると、アウグスティヌスは言う。

あらゆる自然は壊敗し得るか、し得ないかどちらかである。もし、壊滅し得ない自然であれば、壊敗し得る自然よりもよく、また、壊敗し得るものであっても、疑いなくよい。なぜなら、壊敗は、それを、より程度の低い善にするからである。それゆえ、すべての自然はよい。「自然」と、私が言うのは、通常は「実体」とも言われる。¹⁹（傍点本多）

アウグスティヌスにとっては、事物の自然な移り変わりや生き死にも調和の一部である。「あるものが死に去り、他がその後を継ぐとき、時の秩序の中で特別の美がある」。²⁰

アウグスティヌスは、悪は道具として神に使われることもあるとしている。神は、ユダを使ってイエスを裏切らせ、ユダヤ人たちを用いてイエスを十字架につけさせた。そうすることで諸国民が神を信じ祝福されるように計らったのである。さらに、神は悪魔さえも用いて、人間の信仰や敬虔さを試し、鍛えるのであると、彼は考える。²¹

他の人間によってもたらされる苦も、善なる神によって許されなければありえなかったものだから、本当の悪ではない。アウグスティヌスは、この世の美は相反するものの対立によって達成されるのであり、罪人の歪みも、それ自体では厭わしいものであるが、全体として美に貢献するものであると言っている。²²

こうした見方では、神が悪を行わせていることになり、善なる神の概念と矛盾するが、アウグスティヌス自身もその矛盾に気づき、罪には二種類あり、罪の罰として神が成させるものと、もともとアダムの罪から来ているか、人間が自分で増幅させている罪とがあるとしている。²³ しかし、それだけでなく、アウグスティヌスは、神が救われる者と罪と罰に定められる者とを恣意的に前もって定めて、罰に定めた者に罪を犯させているとする予定説さえも導入している。そこでは、罪に定められた者が罪を犯し、そのために罰せられることさえも、神の摂理を成就するという観点から、「至高の善たる神が悪を善用している」例とされている。²⁴

＜ 3 自由意志の濫用による墮罪＞

アウグスティヌスは人間の死に関して、聖書の創世記どおり、人間は神に従っていれば不死の生を享受すべく創られたと考える。そして、最初の人間アダムとエバが、神に与えられ

た自由意志の濫用によって不服従の罪を犯し、その結果、死ぬべき存在となったのだと言うのだが、これが彼の考える人間悪の起源であり、人間の原罪である。彼は、神に最初に造られたときアダムとエバは全く罪を知らぬ無垢の状態にあったと考える。(4世紀ぐらいまでは、アダムが完全な人間として創られたとは考えられていなかった。それを教義に持ち込んだのは、アウグスティヌスだという指摘がある。²⁵⁾

神は、人間をいわば天使と獣たちとの中間に位置する自然本性を持つものとしておつくりになったのである。つまり、人間がその創造主に対してみずからの真実の主として従順であり、敬虔な心で服従して、その方の命じるところを守るかぎり、彼は天使たちとの共同の生に加わって、死が介入してくることもない終わりなき至福の不死性を確保することになっていたのである。しかし、その人間が自らの自由な意思を濫用して主であり神である方を傲慢と不従順によって損なうかぎり、彼は死を宣告されて欲望の僕となって、死後も永遠なる責苦にさいなまれるよう定められ、獣のように生きることになっていたのである。²⁶⁾

なぜ楽園の状態に悪が入ったかに関しては、アウグスティヌスは、よくある神話的解釈と異なり、サタンの誘惑が最初だとは言っていない。

人間は誘惑を受ける前にすでに悪への志向を持っていたからこそ、誘惑に耳を傾け、罪を犯したのだと彼は考える。人間が蛇に、「それを食べると、目が開け、神のように善悪を知るものとなる」(創世記3:5)と言われ喜んだのは、すでに彼が自己中心の傲慢な傾向を持っていたからである。²⁷⁾

あらゆる悪は自由意志による、という主張がここにはある。「邪な意志が、すべての悪の原因なのである」。²⁸⁾ こうして、アウグスティヌスによれば、すべての悪は、自由意志の濫用という観点から説明される。²⁹⁾ 「私たちは意志の自由な決定 (libero voluntatis arbitrio) からして悪を行う」³⁰⁾ のである。その自由意志を与えたのは神であるが、その責任は神には無い。なぜなら、自由意志は、正しい行いを欲するために与えられたのだからである。神は、正しい行いをする者には幸福を与え、罪を犯す者には罰として惨めさを与えるが、そのことから、正しい行いをするのが神の意志にかなっていると分かると、アウグスティヌスは言う。³¹⁾ 神が人間に自由意志を与えたのは、人間が、人間である限りにおいて、「欲するならば、正しく生きることが出来る」ゆえに、善だからであり、それは、換言すれば、欲することが出来なければ、つまり、欲する自由意志がなければ、正しく行い得ない、ということだからである。人間は善であるために、自由意志が必要なのである。

自由意志の濫用による罪、という見方は、あらゆる存在は壊れたときでさえ善であるという、先に見た信念と矛盾し、悪が存在することを認める立場であるが、そのような矛盾はここでは何ら問題とされていない。アウグスティヌスの論点は、彼にとってはあまりにも自明な神の善性を、一方では自然の秩序から、また一方では人間の自由意志による罪という、彼にとってはどちらももっともな別の角度から述べることであったように見える。結局アウグスティヌスは、神の善と全能を公理的に信じていたので、系統だった神義論の必要性を現在の哲学者ほど切実に感じてはおらず、神の義と善をさまざまに裏づけることで彼にとっては十分だったのであろう。

< 4 悪の芽は被造物が無から創造された故にもつ本質的な不完全さにある >

しかし、ここで問題となるのは、なぜ善きものとして造られた人間が、悪を選べたのかということである。無からの創造を信じるアウグスティヌスは、人間が無から創られた、ということに、自由意志で悪を選択する弱さの起源を見出している。

かくして、悪しき意思はその起源を、彼が自然本性であるという事実から得るのでなく、自然本性が無からつくられたという事実から得ることを見出すであろう。なぜなら、もしも自然本性が悪しき意思〔ママ〕の原因であるのなら、善から悪が生じることになり、したがって善が悪の原因であるといわざるを得なくなるであろう。じっさい、良き自然本性から悪しき意思が生ずるとすれば。³²

[...] 神が造り定めたすべてのものは、最高のものから最低のものまで、卓越性の段階によって秩序づけられ、すべて善なるものであるが、あるものは他のものよりもより善いということ、また、創造主なる神は自らの知恵によって力強く働き、いわば存在しなかったものを存在しうるようにしたのであって、それらの本性は無から造られたということ、また、存在する限りのものは善であるが、欠けたものである限り、自らが神から生まれたのではなく、神によって無から造られたことを示しているということ、これらのことを学びなさい。³³

こうして、アウグスティヌスは、一方で悪の根源を人間の自由意志による不服従に帰しておきながら、もう一方で、本質的には、神による無からの創造にその根源と責任を転嫁しているとも取れるのである。

ヒックは、アウグスティヌスが、アウグスティヌスの時代の哲学的主流をなすネオプラトニズムの影響を受け、存在と善とを同一視する考えを取り込んでいたと指摘している。最高の善は、もっとも強烈な実在を持つ（あるいは、実在である）、そして善の度合いが減るにつれて存在の度合いも減るのである。アウグスティヌスは、この考えを明確には体系付けて論じてはいないが、存在は善であるという前提は彼の論に表れていると、ヒックは指摘している。「悪は善の欠如であるというアウグスティヌスの教義は、悪は神によって創られたものではなく、神の宇宙における悪の地位は二次的で、寄生的なものであり、主たる本質的なものではないという、形而上学的な主張なのである」。³⁴

< 5 真の悪の存在の否定 >

アウグスティヌスは、無からの創造に悪の芽を見ているが、全能で完全な神（つまり、道徳的にも完全な神）によって創られた世界に悪があることはやはり矛盾である。その理由からもまた、彼は、真の悪の存在を否定する。「自然悪」などというものはない。すべて造られたものは善だからである。われわれの内の非理性的な（irrational）存在は、われわれに苦難をもたらすが、宇宙全体としてみれば、神の恵みと美とを増す貢献をしているのである。われわれの限られた視野からはそれが見えないが、われわれはそれを信じるべきである。³⁵

このようにして、究極的には悪の存在を否定するのが、アウグスティヌスの神義論である。それは、信仰に基づく信念であり、信仰が先立ってあることは以下の記述から明らかであろう。

われわれは、何であれ悪しきものを神が許した時に、神がなされたことが善いということ疑ってはならない。なぜなら、神はそれを、ただ正しい判断によってなされたからである。—そして、たしかに、正しいことはすべて善い。それゆえ、悪は、悪である限り善ではないが、それでも、善いものだけでなく悪しきものもあることは善いのである。なぜなら、もし悪しきものも存在することが善いのでなければ、それらが全能の善によって存在を許されるはずがないからである。全能の善であるその方にとってはご自身の意図どおりに何でも出来るように、意図に反するものを存在させないことはやさしいことだからである。³⁶

すべてのものには、それを存在させる神の目的がある。われわれ人間は洞察力に欠けるためにその目的が見えないが、その目的が見えないという事実さえも、われわれに謙讓の徳を与えるために役に立っていると、アウグスティヌスは考える。神が創造したものに悪は無いのである。

<恩寵による救い>

金子晴勇は、アウグスティヌスが「[「信仰の恩恵」(*gratia fidei*)、すなわち「信仰によって」(*per fidem*) 恩恵が獲得されるという主張を通して、さらに信仰自体は神の賜物であり、神の「召命」(*vocatio*) が、つまり神の側からの呼びかけが、イニシアティブをとらなければ、信仰の開始は起こらないと説くにいたった。これはパウロの予定説を解釈しながら生じた変化であるが、その背景には人間を類的に改廃のかたまりと見る原罪説が存在」と指摘している。アウグスティヌスの神義論は、憐れみに満ちた神が罪人である人間に呼びかけ、信仰へと召して、救いへと導くという救済論によって最終的に神の義を主張することに帰結する。金子はアウグスティヌスが『シンプリアヌスに答えた諸問題』で「ローマの信徒への手紙」(9: 10-29) の予定説を扱い、「召されていない者は誰も信じない。[...] だから神のあわれみが召命することによって先行していないなら、誰も信じることはできないし、信仰により義とされることも、善き行為をなす能力を受領することも始まらない。それゆえ恩恵があらゆる功績に先行している」(*Ad Simplicianum de diversis quaestionibus*, I, q. 2, 7) と述べているのを引用し、アウグスティヌスにおいては「予定を神のあわれみの恩恵から説くことにより救済の順序が明確になっている。すなわち召命、信仰、義化、能力の受容、善き行為、選びという救済の順序がこのテキストで述べられている」と指摘している。³⁷ 神が憐れみによって人間に呼びかけ、救いへと導こうとしているというこの考えは、なぜ善かつ全能の神が創ったはずのこの世に悪があるのかという、最初に提示された、悪はなぜ存在するのか、という伝統的な神義論の問題とは直接に関係があるものとは見えないが、この世の悪に対して神は何をなすかという、もうひとつの神義論的な問いに通じる。

<J・ヒックによるアウグスティヌス批判>

ヒックは、『悪と愛の神』(*Evil and the God of Love*) でアウグスティヌスの神義論をエイレナイオス型神義論と対照させて論じ、エイレナイオス型神義論を提唱しているが、そこで、アウグスティヌス論の難点を次のように指摘している。

第一に、霊的にも道徳的にも善に造られた人間が悪を好んだというのは矛盾である。第二

に、人間は自由に堕ちたと言うが、神はこの世のはじめ以前よりそのことを知っていて、ある者を救い、ある者は滅びるにまかせているということになる。人間が堕ちることを時の最初から予知していてそれでも人間を創ったなら、神に責任がある。³⁸ 第三に動物の痛みについて、アウグスティヌスの議論は答えていない。アウグスティヌスは、動物の痛みは、それを人間が見て、生物には自己の体の統一の取れたまとまりを保持する要求がいかに強くあるかを知り、神がいかにすばらしい統一ですべてを創ったかを知るためと、考える。³⁹ しかし、この考えは人間中心で、神に知られることなしにすずめの一羽も落ちることがないと言われる、鳥や花をもいつくしむ天の父の概念には合わない。⁴⁰

また、神は悪を転じて善にできると、アウグスティヌスは言うが、それでも、悪のまままで永遠の罰を受ける者もあるとも考えている。これは、地獄の問題に通じる。⁴¹

＜D・R・グリフィンによるアウグスティヌス批判＞

それでは、プロセス神学の立場からのアウグスティヌスへの批判はどうか。

グリフィンもまた、アウグスティヌスの自由意志神義論の問題を大きく三つ指摘している。第一に、善人が苦しむこと、善人も悪人も同じに賞罰を受けることは、1)人間が宗教に物質的な見返りを期待しないため (*City of God*, I, 8; XXII.22)、2)来世の報いがあることに気づかせるため (*CG* I, 8)、また、善人が悪を見て自らの善を確認し、自らの不完全なところは正す助けとなるから、などと考えられている。そして、アウグスティヌスは来世や、この世を越えた究極的調和を考えている。(カラマーゾフのイヴァンはその、調和の鍵を返そうとした)。しかも、多くの人が永遠の罰を受けるということに対してアウグスティヌスは、すべての人がむしろ罰にふさわしいのに救われる者がいるのが恵みであると答えた。(原罪をふまえた考え)。⁴² しかし、ここには無理があるとグリフィンは考える。すべての人が罰にふさわしいと論じるために、アウグスティヌスは、罰が罪につりあっていると論じねばならなかった。そこで、アダムの罪が実際非常に重かったので、すべての人が罰にふさわしいと論じた。しかしそこで、人類がみなアダムにおいて罪を犯していることを論じねばならなかった。しかし、その論点は弱い。⁴³

第二に、神の全知と人間の自由意志は両立しない。神がわれわれの行動の前からすべてを知っているならば、われわれには他の行動はとりえず、ゆえにわれわれが自由であるというのは幻想に過ぎない。⁴⁴

第三に、神の全能と人間の自由意志は両立しない。アウグスティヌスは、「神が全能といわれる理由はほかならず、神が自分の意志することを何でもできることと神の全能の意志の効力がいかなる被造物の意志によっても妨げられないことにある」(*E[nchiridion]*, XIV, 96) と言っており、またその一方で罪とは神の意志にそむくことであるという見方を保持している。⁴⁵ しかし、グリフィンが指摘するのは、その見方では、被造物が真に神の意志に反する行動を取れるということであり、神の全能の定義で言われたこととは矛盾する、ということである。一步譲って、神は悪からも善を成すことができ、それが、被造物が神の意志を妨げることができないということの意味であるとしても、その場合、人間の罪は神が単に許しているのか、なさせているのかという問題がおきる。「神が許すことなしには成されないであろうが、一たしかに、神の許可は不本意にはなく、神が望んで与えるものである」という、『エンキリデイオン』(XXVI, 100)の言葉を引いて、グリフィンは、いずれにしろ、神の意志に反したこ

とは神の許しなしには行えないというのがアウグスティヌスの世界であり、そうになると、論理的には自由意志による罪はありえない、と言う。⁴⁶

グリフィンは、アウグスティヌスの見方を、このようにまとめている。

要するに、アウグスティヌスの立場では、本質的に明らかに悪であるものは、ただひとつしかない。それは、罪、つまり、悪しき意志である。しかし、この、一見して明らかな悪は、実は見かけ上の悪に過ぎない。なぜなら、宇宙は、罪があったほうが、なかった場合よりも良い場所となっているからだ。もうひとつ、本質的に悪と考えられうるものは苦難であるが、苦難は、決して真の悪ではない。なぜなら、苦難は常に罪への正当な罰であるか、あるいは永遠の命を達成する助けだからである。永遠の生は、いかなる苦難をも償って余りある大きな善であるから、その助けとなるものも真の悪ではあり得ない。結局、限られた文脈や部分的な視野のうちで見れば悪であっても善の道具として用いられているものは、宇宙全体の文脈で見れば悪ではない。ゆえに、実際は真の悪は存在しないということになる。⁴⁷

このように述べ、グリフィンは、この世に真の悪が存在しないというこの立場が、第一に、われわれの経験に即したものであるか、第二に、キリスト教信仰そのものにふさわしいものであるか、疑問であると反論している。⁴⁸

アウグスティヌスやエイレナイオスの神義論が現代の神義論と異なるのは、それらの視座では悪の存在が神の存在を疑わせる理由になっていないことである。繰り返しになるが、アウグスティヌスは、神が善で全能であるのに悪が存在するということを、信仰の立場でさまざまな角度から説明しようと試みているのである。アウグスティヌスの言葉は、ときに理念的すぎて事実と相違するように思われることさえある。たとえば、彼は、すべて正しいものは善く、罪人が罰せられ善人が報われるのは善である、ということをも自明の真理のように前提し、「罪人を不幸で苦しめ、善人に幸せを与えているのは神である」⁴⁹という見方に立つが、それは、不幸に見舞われる多くの善人の苦難を何ら説明しない。

2 アルヴィン・プランティンガによる自由意志神義論

今日一般的に、自由意志型の神義論は次のように理解されている。神は人間に自由意志を与えた。これは、自由に神に従う方が、強制されて従うよりも良いからである。しかし、人間はその自由意志の濫用によって罪を犯した。C.S. ルイスは、神は全能であるが、神の全能もこの墮罪を防ぐことはできなかったと説明する。なぜなら、自由意志を与えておきながら墮罪を犯させないように人間を縛るのは、自由を与え同時に自由を与えないという論理矛盾だからである。神の全能とは、論理的に可能なことをすべて行ない得る能力であり、矛盾したナンセンスを行なうような力ではないのである。⁵⁰たとえば、丸い四角形をつくるようなことは⁵¹全能の者にも出来ない。

今日において、自由意志論に立つ神義論を代表していると言われるのはアルヴィン・プランティンガである。もっとも彼は、今日の世界で悪の問題について理論的に神の義を「証明」することのおそらく不可能ともいえる困難さを意識しており、自らの議論を、「自由意志弁護

論」(Free Will Defense)として提唱している。⁵²その「自由意志弁護論」とは、次の二つの命題に矛盾が無いことを示す試みであり、次の二つの命題がともに真であることを証明するものとしては主張されていない。

(1) 神は全能、全知で、完全に善である。(この命題には、神が存在するという含まれる)。

(2) 世界に悪が存在する。⁵³

彼は、自分の自由意志弁護論が、「弁護論」であって、「神義論」ではないことを強調する。これが証明しようとするのはただ、神が全知全能完全なる善であることと世界に悪があることとが、論理的に矛盾せず両立する可能性がある(possible)ことまでである。彼は、超世界的墮落やサタンの可能性についても、「それが真であることを主張する必要は無く、ただ、可能である」ことを示せば十分であると述べている。⁵⁴

プランティンガは論理的な不可能性(logical impossibility)と因果的、自然的不可能性(causal, natural impossibility)とを区別し、論理的不可能性の他にも、人間が弾丸よりも早く飛んだり、大西洋を泳いで横断したりするような範疇のいわゆる自然的不可能性があることを示したのちに、「自由意志論による弁護論の核は、神は道徳的善だけが存在して(少なくとも現実にこの世界にある程度の道徳的善が存在して)道徳的悪が存在しない宇宙を造ることができなかった、という可能性の主張である」⁵⁵と言っている。

自由意志論で、プランティンガが言う「自由」とは、「Sという人がある行為に対して自由であるなら、彼はその行為を行うか控えるかに関して自由であり、いかなる因果律も先行する条件も彼がその行為を行うか行わないかを決定しない」⁵⁶ということである。

自由意志弁護論は、以下のようにまとめられる。

[道徳的善悪にかかわる行為に関して] 自由な(そして、自由に、悪の行為よりも多く善行をなす)被造物を含む世界は、他の点がすべて同じなら、自由な被造物をまったく含まない世界より価値がある。神は、自由な被造物を創造することが出来るが、その自由な被造物が正しいことのみをずるようにしたり、定めたりすることは出来ない。もしそうするならば、それらのものは結局意味ある [= (プランティンガの文脈では) 道徳的な] 自由ではなくなるからである。正しいことを自由に行うのではなくなるからである。ゆえに、道徳的に善をなせる被造物を創るためには、神は、悪もなせる被造物を創らざるを得ない。そして、神は、これら被造物を、悪を行うに任せると同時に悪を行わせないようにすることも出来ない。実際、神は、意味ある自由を持つ被造物を創り、その中のあるものは、自分たちの自由を用いて悪に走った。これが悪の源である。これら自由な被造物が時に悪を行うことは、神の全能に反することでもなく、神の善に反することでもない。神が道徳悪を未然に防ぐことは、道徳善を削ることによってしか出来なかったはずだからである。⁵⁷

プランティンガは、「自由に善ばかり行う被造物だけを含む世界は論理的に可能であり、神はそういう世界を造れたはずではないか」という反論を予測して、神は論理的に可能な世界をすべて造れるわけではないと言う。神は、世界や人間を創造したが、人間が行う物事の状況は創造(create)したのではない。世界や人間が存在することによって可能となった状況を

現実化 (actualize) しただけである。⁵⁸

論理的に可能な世界ならば神はどれでも現実化できるはずだという考えを否定する反証として、プランティンガは、たとえば、神でも過去を変えることはできないと言う。たとえば、アブラハムがメルキゼデクに出会わなかったことは、論理的には可能だが、いったんアブラハムがメルキゼデクに出会った後では、その事実を反することは、現実化できない。⁵⁹そして、何よりも、プランティンガが指摘するのは、「自由に善ばかり行う被造物を創る」という命題に含まれる論理矛盾である。

神は、あるひとつの行為について、人間が「自由に」それを行うように定めることは出来ない。もしも神がなさせたり、なすように定めたのであれば、実際にはその人は「自由に」行ったのではないからである。⁶⁰

と彼は言う。この考えに対しては、反論として、「神はわれわれが自由に何かのことは行う状況を作れるし、それも、われわれがそうすることを予知して、出来る。とすれば、神はわれわれが自由にその「何か」を行うように出来るとは、言えないか？」という意見が出されよう。プランティンガも、そうした反論を予想して、確かに広い意味ではそうしたことも言えるであろうが、自由意志弁護論で彼が言っているのは、そうした広い意味で神がわれわれに何かをさせる、ということではないと言う。⁶¹また、「自由に善ばかり行う被造物だけを含む世界は論理的に可能であり、神はそういう世界を造れたはずではないか」という問いへのもうひとつの答えとして、それでもやはり、悪の無い世界を造ることが神にも出来なかった可能性はあるというのである。彼は、「超世界的墮落」(transworld depravity)⁶²によって、世界が汚染されていると考えれば、神が全能であっても、善ばかりで悪の無い世界を創ることができなかったということはある。また、サタンなど、人間以外のものの仕業とも考えると、考える。

この自由意志弁護論に対する反論を、まず、グリフィンのものから見てゆきたい。

グリフィンが、神が全能で実際はあらゆる苦しみを差し止める力を持っているにもかかわらず、自由意志を尊重してそうしないということが、いかにそれが人間の道徳的、霊的発達のためというような理由をつけてもやはり、神の善性と矛盾すると言う。彼は、自由意志弁護論の主張の本質を次のように考える。

神は、アウシュヴィッツや広島やかつての北米先住民大虐殺を防ぐこともできたし、今、世界で、これほどに多くの人々の飢餓を防ぐこともできるはずだ。しかし、そうすることで、一時的に痛みや苦難を避けることは、実際に長期的目的、つまり人が決断することによって道徳的、霊的資質を発達させるという目的を妨げることになる。それゆえ、この目的のためには、真の自由と規則的な因果律の法則が必要だけでなく、最も重要な道徳的・霊的質の実現のためには痛みや苦難が不可欠の条件なのである。⁶³

そして、自由意志弁護論では「神が本質的にすべての力を持つために、被造物は神が自由に彼らの中の或る者たちに委託した限りにおいてのみ力を持つ」ことになると強調し、さまざまな自然の法則も神が強制的に世界に押し付けたものと考えられていることを指摘して、⁶⁴

『悪の問題再考』（*Evil Revisited*）で10の問いを提示している。⁶⁵すなわち、

- 1) 「世界の基本的な構造のすべての面が、道徳的・靈的資質を持った被造物の向上に必要なものとして正当化されうるだろうか」。
- 2) 「世界の苦難の多くが、徳を生み出すどころか、その逆を生んでいる。貧困や飢えは […] 勤勉さや協力よりもむしろ、しばしば犯罪や戦争を引き起こしている」。
- 3) 神に対する自由の重要性（これをグリフィンが「神学的自由」と呼ぶ）について言えば、神に対する自由は、「社会的、政治的自由と何の関係もない」。われわれは、社会的・政治的自由が重要であると知っているが、これらの自由は、神学的自由がなくともありうる。「実際、神学的自由こそが、これら他の自由の限界を作ることになるのである」。なぜなら、社会的・政治的自由の限界は通常人間の罪の結果つまり、神の意志に反した行為の結果、起こるからである。
- 4) 全能の神なら仮定として、われわれとほとんど同じで、ただ神に対して真の自由を持たないという点においてのみ異なる生物を造ることもできたはずである。伝統的な自由意志論を採る神学者は、自由は必要であると述べその理由として、われわれが真に自由でなければ、われわれは自分たちが自由に罪を避けたと感じることや、自由に、道徳的・靈的徳を増したと感じることもできないはずであると、答えるかもしれない。また、この世は楽園であっても良かったはずであるという主張に対しては、自由意志論者は、神は実際、楽園を創ることもできたが、それは享楽主義者の楽園であり、「ありうる最良の世界ではない」と答えるかもしれない。しかし、「伝統的な自由意志弁護論者が、罪と徳のスペクトルを重要視せざるを得ず、喜びと苦難のスペクトルを事実上問題にしない程度は、行き過ぎに思われる」。
- 5) 道徳的問題として、自由意志弁護論は、冷淡さを助長する。
- 6) 動物の痛みは、動物が道徳的・靈的徳を向上させるために役立つものではない。それゆえ、正当化できないであろう。
- 7) もし、神の唯一の目的が人間のような被造物にしか関わらないものであれば、そのような被造物を創るために何十億年もの時を費やす進化の過程を用いたのはなぜか？
- 8) 神が実際はすべての罪や、災害を防ぐことができるのにそうしないなら、われわれは、「真に礼拝に値する神はいない」と言いたくなるだろう。
- 9) 自由意志にたつ弁護論者や神義論者は、「自然悪」について説明しきれない。唯一ありうる説明は、自然によって引き起こされる災厄は悪魔によるというものだが、あまり信憑性がない。悪魔を考えない者は、いわゆる「自然悪」は見かけ上の悪に過ぎないとする傾向があるが、それも、同じくらい信憑性に乏しい。
- 10) 自由意志論は、結局、真の悪が起こること自体を否定する傾向がある。

9番の、自然悪は悪魔によるという見方に関しては、グリフィンは、ことにプランティンガを意識していると思われる。同書で、彼は、特にプランティンガの「超世界的墮落説」を批判し、プランティンガは悪魔を持ち出して説明しようとするが、そのようにありそうにない仮説を持ち込むことによって自由意志弁護論に論理矛盾がないことを示そうとしても、信憑性は増さないと厳しく述べている。また、プランティンガに対してはさらに、プランティン

ガが、自由意志弁護論が正しいことを証明することが不可能であることを認め、自説に論理矛盾がないことを示すのみで満足していることに対し、論理矛盾がないことを示すのみでは哲学者の義務は果たせていない、と批判している。⁶⁶

その他の神学者、哲学者などによって出されている、自由意志弁護論に対する主な反論は、おおかた以下のようにまとめられる。

- 1) 自由意思で善のみ行なう者もありうるはずだし、全能の神ならばそのような者のみを造れたはずである。⁶⁷
- 2) 悪が全くない無垢の状態に造られたものが悪を行なうということは、矛盾している。⁶⁸
- 3) 自由はそれほど与えられていない。人間はそれほど自由ではない。⁶⁹
- 4) 生物の進化などを見れば人間の進化も、低次から高次へと完成に近づくと見るほうが自然であり、人間がまず完全な形で造られ、墮罪を犯し、それを贖うために神の御子が受肉して十字架にかかったという教義自体、信じられない。⁷⁰

1の、神は自由に善のみ行なう被造物を造れたはずである、という批判は、J.L. マッキーが明確になしており、⁷¹ これは、自由意志論に対する、もっとも有力な反論のひとつである。しかし、マッキーの論は、神との関係においては誤りである。グリフィンやヒックも指摘するように、神との関係において常に正しく応答するように仕組みで被造物を造るのは、行動をするその被造物本人が正しいと考えていても実は催眠術をかけられているようなもので、真に自由な応答とはならない。⁷²

結論的考察

自由意志弁護論は、1)神の全能と、2)神が人間に自由意志を与えたということ、3)自由意志が良いものであること、4)自由に神に従うほうが、強制されて従うよりのぞましいことをすべて前提として、論証なしにこれらを真として論を立てている。それゆえ、そのどれかひとつでも受け入れられなければ、この型の神義論は成り立たない。また、われわれは、アウグスティヌスが神の全能を妥協なく推し進めた結果、義人の苦難の問題に答える道を失っていることにも気づいた。アウグスティヌスの考えは、西洋キリスト教世界ではほぼ支配的と言える影響力を持ち、日本でも、アダムとエバが自由意志の濫用によって神に不服従の罪を犯し、その結果、不死の生命とエデンの幸福を失ったという説が、キリスト教界全体で奉じられている教義だと思っている人間は多い。しかし、この理論は、キリスト教内でさえも異論が出され絶対的なものではないということが分かった。

一方、プランティンガの考えのように、自由意志による墮落という考え方によっては神の善と全能と悪の存在が両方成り立つことは証明できないと認め、それでも少なくとも矛盾しないことだけは論証できるとする見方も見た。しかし、神の善と全能と悪の存在が矛盾しないことを立証するために、多数の仮説を重ねてゆくプランティンガのやり方は、一見説得力があるように見えても、印象としては神の全能を突き崩すような感がある。特に、「超世界的墮落」ということが真実なら、そのような状態を防げなかった、あるいは防がなかった神の全能や善はどこにあるのかという、神義論の原点の問いに戻ってしまうことになる。

結局、自由意志神義論は、アウグスティヌスがそうであったように、信仰の中の者が神の全能と善性を公理として受け入れて論じた場合にだけ説得力があり、信仰の外にある者、神の全能、善性、あるいは神による創造を受け入れない人に対しては説得力を持たないであろう。ただし、信仰の中にいる者にとっては、神の善性と全能を信じ、神に背いて罪を犯した人間に対して、キリスト・イエスによる救いを与えた神への信仰をさらに強める効果をもつ考え方として力を持ち続けており、これからももち続けるであろう。

-
- 1 近代で最もはっきりとこのことを問うた先駆は、デヴィット・ヒュームに見られる。David Hume, *Dialogues Concerning Natural Religion*, ed. H. D. Aiken (New York, Harper, 1938), Part X, p. 66.
 - 2 Jane Mary Trau, *The Co-Existence of God and Evil*. American University Studies (New York, San Francisco : Peter Lang, 1991), p. 1.
 - 3 C.G. ユング『ヨブへの答え』野村美紀子訳（東京：ヨルダン社, 1981）, pp. 122-123.
 - 4 ユング, p. 27.
 - 5 たとえば、John Hick, *Evil and the God of Love* (1966, Houndmills and London: Macmillan, 1985), p. ix; “Positive Atheism’s Big List of Quotations,” (<http://www.positiveatheism.org/hist/quotes/quote-s6.htm>) も参照。
 - 6 本多峰子「プロセス神学の神義論」二松学舎大学『国際政経』第12号（二松学舎大学国際政経学会, 2006）, pp. 41-83.
 - 7 Irenaeus, *The Scandal of the Incarnation*, tr. and annotated by Joseph P. Smith (San Francisco: Ignatius, 1952), p. 68.
 - 8 St. Irenaeus, *The Scandal of the Incarnation*, p. 66.
 - 9 Hick, *Evil and the God of Love*, pp. 61-62.
 - 10 St. Augustine, *City of God*, tr. Henry Bettenson (London : Penguin, 1972 ; rep. with introd by John O’Meara, 1984), XI, Ch 10, p. 440.
 - 11 アウグスティヌス「基本書と呼ばれるマニの書簡への駁論」『アウグスティヌス著作集7—マニ教駁論集』岡野昌雄訳（東京：教文館, 1979）, 第35章, pp. 161-162 ; cf. Augustine, *On the Nature of Good* (Excerpted from *Nicene and Post-Nicene Fathers, Series One, Volume 4*, ed. Philip Schaff, D.D., LL.D. American edition, 1887 ; Online edition, by K. Knight (2004) (<http://www.newadvent.org/fathers/1407.htm>)). Ch.4.
 - 12 St. Augustine, *The Enchiridion : On Faith, Hope, and Love, from Augustine : Confessions & Enchiridion*, tr. and edited by Albert C. Outler, Ph.D., D.D. (1954), Digitalized by Harry Plantinga (n.d.) (<http://www.newadvent.org/fathers/1302.htm>), IV, 13-14.
 - 13 アウグスティヌス「基本書と呼ばれるマニの書簡への駁論」, 第34章, p. 159.
 - 14 Arthur O. Lovejoy, *The Great Chain of Being* (Cambridge: Harvard Univ. Press, 1934 & 1964), p. 59 の定義は以下のとおりである。「厳密ではあるが、めったに厳密には適用されない<連続の原理>によって、無限の階層的な秩序をもち、最も乏しい種類の存在から、「あらゆる可能な」段階を通して、完全を極めたもの (*ens perfectissimum*)、つまり、より正統的な言い方をすれば、最高度の可能性を実現した被造物（ただしそれと絶対者との相違は無限であると考えられる）—にまで至る鎖の環から成り立っていて、その環の各々が、そのすぐ上のものと下のものと「可能な限り小さい」相違によって異なっている、という世界観」。
 - 15 Cf. A. O. Lovejoy, <充満の原理> (the principle of plenitude), *The Great Chain of Being*, p. 52.
 - 16 St. Augustine, *City of God*, XII, 4, p. 475. アウグスティヌス『神の国』(三) 服部英次郎訳（東京：岩波文庫, 1983）, 12巻4章, p. 101.
 - 17 St. Augustine, *On Free Choice of the Will*, tr. Thomas Williams (Indianapolis: Hackett Publishing Company, 1993), III, 9, p. 87.
 - 18 Augustine, *On the Nature of Good*, VIII.
 - 19 St. Augustine, *On Free Choice of the Will*, III, xiv, p. 99.
 - 20 Augustine, *On the Nature of Good*, VIII

- 21 St. Augustine, *On Grace and Free Will*, excerpted from *Nicene and Post-Nicene Fathers, Series One, Volume 5*, Edited by Philip Schaff, D.D., LL.D., American Edition (1887) ; online edition, by K. Knight (2004) (<http://www.newadvent.org/fathers/1510.htm>), XX.
- 22 St. Augustine, *City of God*, XI. 18 & 23.
- 23 St. Augustine, *On Free Choice of the Will*, I., 1, p. 1.
- 24 St. Augustine, *The Enchiridion*, XXVI, 100.
- 25 Richard Swinburne, *Providence and the Problem of Evil* (Oxford, 1998), p. 39.
- 26 St. Augustine, *City of God*, XII, 22, p. 502 ; cf. also XIII, 1, p. 510 : 邦訳はアウグスティヌス『神の国』服部訳(三), 12 卷 22 章, pp. 161-162. また、(三)13 卷 1 章, p. 177 第も参照のこと。
- 27 Augustine, *City of God*, XIV, 13, p. 573.
- 28 Augustine, *On Free Choice of the Will*, III, 17, p. 104.
- 29 David Ray Griffin, *God, Power and Evil : A Process Theodicy* (1976 ; London : Westminster John Knox Press, 2004), p. 55 ; Augustine, *On Free Choice of the Will*, III, 17, p. 104 ; cf. also *Enchiridion*, VIII, 23.
- 30 聖アウグスチヌス『自由意志論』, 今泉三良, 井沢弥男訳 (東京 : 創造社, 1969), p. 69.
- 31 アウグスチヌス『自由意志論』, pp. 72-74.
- 32 St. Augustine, *City of God*, XII, 6, p. 477. 邦訳 : アウグスティヌス『神の国』(三), 12 卷 6 章, p. 111.
- 33 アウグスティヌス「基本書と呼ばれるマニの書簡への駁論」, 25 章, pp. 141-142.
- 34 Hick, *Evil and the God of Love*, p. 49.
- 35 St. Augustine, *City of God*, XI. 22 ; XII. 4, pp. 453-454, 475-476.
- 36 Augustine, *Enchiridion*, XXIV, 96.
- 37 金子晴勇『アウグスティヌスの人間学』(東京 : 創文社, 1982), pp. 206-208.
- 38 Hick, *Evil and the God of Love*, pp. 67-69.
- 39 Augustine, *On Free Choice of the Will*, III, p. 117.
- 40 Hick, *Evil and the God of Love*, p. 85.
- 41 Hick, *Evil and the God of Love* p. 89.
- 42 Augustine, *Enchiridion*, XXV. 99.
- 43 Griffin, *God, Power and Evil*, p. 56. (アウグスティヌスの参照箇所は、グリフィンによるが、そのとおりに該当箇所がある)。
- 44 Griffin, *God, Power, and Evil*, pp. 60-61.
- 45 Griffin, *God, Power, and Evil*, p. 63.
- 46 Griffin, *God, Power, and Evil*, pp. 61-63.
- 47 Griffin, *God, Power and Evil*, p.71.
- 48 Griffin, *God, Power and Evil*, p.71.
- 49 Augustine, *On Free Choice of the Will*, II, 1, p. 29.
- 50 C.S. Lewis, *The Problem of Pain* (1940, Collins, 1957 ; paperbacks, 1977), p. 16.
- 51 「丸い三角」という形容は、論理矛盾に言及する時によく用いられるようである。たとえば、cf. Griffin, “Creation out of Nothing, Creation out of Chaos, and the Problem of Evil,” in Stephen T. Davis ed., *Encountering Evil: Live Options in Theodicy*, 2nd ed. (Louisville, Kentucky : Westminster John Knox Press, 2001), p. 115.
- 52 Alvin Plantinga, “The Free Will Defense,” in William L. Rowe ed. *God and the Problem of Evil* (Oxford : Blackwell, 2001), pp. 91-120.
- 53 Plantinga “The Free Will Defense,” p. 92.
- 54 Plantinga “The Free Will Defense,” p. 117.
- 55 Alvin Plantinga, *God, Freedom and Evil* (Grand Rapids : Eerdmans, 1974), p. 31
- 56 Plantinga “The Free Will Defense,” p. 93.
- 57 Plantinga “The Free Will Defense,” pp. 93-94.
- 58 Plantinga “The Free Will Defense,” pp. 95-96.
- 59 Plantinga “The Free Will Defense,” p. 97.
- 60 Plantinga “The Free Will Defense,” p. 97.

- 61 Plantinga “The Free Will Defense,” p. 98.
- 62 Plantinga “The Free Will Defense,” p. 110.
- 63 David Ray Griffin, *Evil Revisited : Responses and Reconsiderations* (New York : State University of New York Press, 1991), p. 15.
- 64 Griffin, *Evil Revisited*, p. 16.
- 65 Griffin, *Evil Revisited*, pp. 16-21.
- 66 Griffin, *Evil Revisited*, pp. 45 & 47.
- 67 John Mackie, “Evil and Ominipotence,” in *The Philosophy of Religion*, ed. Basil Michell (Oxford Univ. Press, 1971), pp. 100-101. Quot., in Plantinga, p. 33.
- 68 John Hick, “An Irenaean Theodicy,” in Stephen T. Davis ed., *Encountering Evil : Live Options in Theodicy*, 2nd ed., p. 44.
- 69 John K. Roth, “A Theodicy of Protest,” in Stephen T. Davis ed., *Encountering Evil : Live Options in Theodicy*, 2nd ed., p. 12.
- 70 Hick, “An Irenaean Theodicy,” p. 41.
- 71 J. L. Mackie, “The Logical Problem of Evil,” in William L. Rowe ed., *God and the Problem of Evil* (Oxford : Blackwell, 2001), p. 86.
- 72 Griffin, *God, Power, and Evil*, p. 183. グリフィンは、Hick, *Evil and the God of Love*, p. 310 を参照箇所としてあげているが、これは第1版 (John Hick, *Evil and the God of Love* (Harper & Row, Publishers, Inc., 1966)) への言及である。